
復讐する織斑一夏

エレンシュキガル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

復讐する織斑一夏

【Nコード】

N3109W

【作者名】

エレンシュキガル

【あらすじ】

原作の織斑一夏とは完全なる別人。所謂ORIMURA ICHIKA。

だが、主人公であり、チートであり、最強。この一夏には原作の欠片も残っていません。束と千冬アンチです。

勿論ハーレムにする予定ですが、ヒロインは未定。故に読者の皆様に決めてもらいたい。

一夏の性格が何処ぞの慢心王みたいになる予感が……つまり、俺様

キャラと言つ事です。ISも勿論オリジナル。直筆ですので設定などに矛盾がある場合がありますが、そこはオリジナル展開と言つ事で御了承下さい。

Prologue (前書き)

作者の性格が存分に込められた作品になりそうだ。不満をぶちまける！ってな感じで。

ヒロイン未定に従い、感想にて募集中。

気軽に暇潰し程度に呼んで頂ければ幸いです。

Prologue

俺、織斑一夏は普通の一般家庭に生まれ、育つはずだった。

俺が普通に平凡に育つ事何て、土台無理な話だったのだ。

幼少の頃は何の変哲もない子供だったと思う。

もし変哲でもない子供じゃなければ、少し他の子供より達観しているだけだっただろう。

幼少の頃の幼なじみとの付き合いも、ほぼ平凡なものだったはず。

その他にも友達付き合いも順調だった。

だが、世界にIS『インフィニット・ストラトス』と名称付く宇宙進出を目指したパワードスーツにより、俺の人生はぶち壊された。

ただ無慈悲に、悲惨に、豪快に、ゆっくりと壊されていく。幼なじみの姉、篠ノ之束と名乗る少女に——そして、自分の姉である織斑千冬によって。

軽率な判断で、自分勝手な思いで、天才だからという理由で、後先考えずに行動した結果で、俺の人生を壊したあの二人をただ純粹に——許すはずも無く赦しはしない。

この俺の憎悪と嫌悪と憤怒の心を隠したまま生きる事など——出来るはずもない。

だから俺は決意した。

同類で、同胞で、姉弟でもある——織斑千冬に。

幼なじみの姉で、姉の親友で、天才にして天災である——篠ノ之束に。

この世界を女尊男卑にして、俺の人生をぶち壊した——ISに。

——復讐する事をここに誓おう。

第一話（前書き）

プロローグは一夏の心が確立した時の心情ですね。この時期が何時なのか想像して頂けると面白いと思います。

まあ、話を進めて行くとわかると思いますが。

この作品は自己解釈や捏造、オリジナル展開があります。

そこの所御了承下さい。

では黒い一夏をよろしく願います。

第一話

幼少の頃の話しよう。

俺、織斑一夏は自我が芽生え始めた時点で普通の人間にはなれなかった。

その時の俺は心が確立していた訳じゃないから、普通とも異常とも認識できなかっただろう。

だが、幼かった俺でも疑問に思うほど世間とは違う環境であり、家庭だった。

——俺には両親がいない。

周りの友人や知り合いには親がいるのに何故俺にはいないのだろう、と俺は初めて疑問を抱いた。

別に家族がない訳じゃない。物心が芽生え始めた——否、芽生える前も俺には姉がいた。

その姉に無邪気だった頃の俺は、何故俺には親がいないのか聞くと

「お前の家族は私だけだ。私の家族もお前だけだ」

そう俺の姉、織斑千冬は言った。

その言葉で俺の心が、実の姉である織斑千冬に不信感を抱いた。

そんな訳ないだろう。俺には俺を産んだ母が、俺を養っていた父がいたはずだと。

これが俺の産まれて初めてとも言える負の感情、不信感だった。

それ以降、姉に何度聞いてもはぐらかされる。

だから、俺はその答えに納得できないまま納得した振りをした。

今ならある程度推測できる。俺が原因か、姉が原因か、世界が原因か、或はそれ以外か。

どれらにしても、ただの推測しかなく、両親か、答えを知ってるそぶりを見せる姉に聞くしかない。

どちらに聞くにしても、答えを得る可能性は低いだろう。

姉に対するこの不信感からいずれ大きく膨れ上がり、嫌悪から憎悪へと昇華するとは小さかった俺には到底想像できるはずもない。

そして月日が経ち、姉の親友である篠ノ之束と邂逅した。

その出会い事態は変わった物でもなかったと思うが、篠ノ之束と出会った事が何よりも問題だったのだ。

「へえー、君がちーちゃんの自慢の弟の一夏君かぁー。……ならいつくんだね！束さんの事はちーちゃんと同じように束姉と呼んじゃって」

その時の俺は気づくはずもなかった。

品定めするような視線に、篠ノ之束が壊す俺の人生に。

何よりも——俺の外見を、内面を、人間を見ていなかった。

織斑千冬の弟だから、親友の弟だから、と姉を通して見ていた目。

通してすら見てなかったかも知れない。

彼女は興味の無い人間には話すらしない。ましてや、自分から話し掛ける何て真似はするはずがない。

純粹な俺は気づかなかった。だからと言って気づいても何も変わらなかったに違いない。

そんな些細な、小規模な話ではないのだ。

それほど、彼女の存在は異質だった。

自分自身を天才と呼ぶ事でさえ異常だが、生き方その物が異端だった。

自分の事しか考えず、興味のある事しか感心しない。

それだけならまだ良いものの、周りに対する影響が計り知れない。

良い意味でも悪い意味でも。

篠ノ之束ほど厄介で最悪な人間は過去にも未来にも現在にもいない
と今の俺なら断言できる。

劇的で運命的で因果的な出会いの後、数分後——或は刹那と呼べる
一瞬の後、篠ノ之性を名乗る束とは相対的に違う箒と言う少女と邂逅した。

第一印象は年相応の可愛らしい少女であった。

姉である束の影に隠れて顔を出す姿は彼女が照れ屋なのだと、俺は
思ったに違いない。

小さな俺は彼女と幼なじみになり、交流を交わしていくうちに箒の
性格を垣間見るのだが、それでも束の性格、性質に比べれば気にする
事もない些細な事であった。

その交流をきっかけに俺は篠ノ之家の道場に通う事になる。

姉である千冬は以前から通っており、箒は物心付く頃から稽古をしていた
ようので、俺は誘われるがままに剣道を習い始めた。

剣道の稽古は厳しかったものの、俺は熱心に取り組んでいたと思う。

俺が小学一年の時点で千冬に養ってもらって生きていたのが理由にもなるだろうが、幼い俺はただ単純に姉と同じ何かをする事で意志表示をしていたのだろうと今は思う。

そんな俺には剣道の、武の才能があつたのか瞬く間に成長して行つた。

束や箒の父であり、剣道の師範、武士とも呼べる篠ノ之柳韻にお墨付きを貰う。

お墨付きでは表現が温いかも知れない。

「君は産まれて来る時代を間違えたかも知れん」

彼、篠ノ之柳韻にそう言われたのだから。

しかし、今の俺なら断言出来る。

産まれた家庭や環境が間違えていても、決して産まれて来た時代は間違えていなかったと。

剣道とは元々、人を殺すのに用いる術である。

今現在ではスポーツとして認識されているが、戦国時代か或はそれ以前の乱世を生き残る術だったのだ。

今の俺なら理解出来るがあの頃の俺は理解何で出来なかった事だろ

う。

そして彼に出会い、師事してもらえたのは僥倖だった。

この世界で生き、自我を保ち、復讐する為には何よりも力が必要だったから。

竹刀では無く、真剣を——自分の心を心情を野望を未来を誇示するには、純粋な力が。

自分を保つ力が、何者にも屈しない力が、野望を希望を未来を見出だす力が。

——何よりも復讐する力が必要だったから。

篠ノ之家との出会いは絶望でもあったが、希望でもあり、幸運だった。

しかし、この後に待ち受ける人生最大とも言える分岐点が俺を待っていた。

——ISの誕生だ。

第一話（後書き）

小説を書くのは難しい。読むのは簡単でも書くのがね……

この話だけじゃ一夏の心を理解するのは難しいかも知れませんが、原作までは一夏の心情を書きたいと思います。

リアリティのある心情にしたいのですが原作の壁が厚い。

原作破壊、キャラ崩壊になりそう。

ヒロインも決まっていなし、感想にて受付中。現時点では筭、鈴、シャルになりそう。キャラ位置的に。

作者はセシリア派何だが……

次話は近いうちに投稿したいと思います。読者の寛大なる心で読んで頂けると幸いです。

第二話（前書き）

感想を書いてくれた読者の皆様ありがとうございます。

心情描写が未来と過去がごっちゃになってわかりずらいと思います
が仕様です。私たちが幼少の頃の心情を覚えていないように一夏も
朧げにしか覚えていません。

なので、過去の話は比較的短いです。

過去の一夏と未来の一夏の心情を比べて思考して頂くと幸いです。

第二話

IS『インフィニット・ストラトス』と名称付く、宇宙空間での活動を想定したマルチフォーム・スーツが篠ノ之束によって発表された。

しかし、ISが発表され世界が劇的に変わった、と言う訳ではない。当初はニュースに流れはしたものの、注目されてはいなかった。

だが、それでも発表のニュースを見たあの頃の俺には純粹に心躍る話であった。

でも人は、国は、世界はその発表を重要視していなかっただろう。

幼い純粹で無垢な心を持っていた俺のような子供しか期待していなかったはずだ。

一人の人間の力で叶えられるはずの無い夢だと民衆は信じなかった。

人は地に足を着けて生きる生き物故に、空に憧れた。現代技術では空を飛ぶ事何て造作もない事。

幼い俺は自由に空を飛び、まだ見ぬ空の彼方——宇宙にまで行ける、夢のような話に興奮した。

しかし、すぐにでもその興奮を打ち碎かれる事になる。

——ISは女性にしか扱えないと言う事実。

その女性にしか使えない事実には俺はショックを受けた。

いい加減な事実、矛盾に差別に。

それでも人は納得するはずもなく、期待するはずもなく、一ヶ月という月日をいつも通りに日々を過ごした。

そう一ヶ月、その一ヶ月後に世界は劇的に根本的に理不尽に変化した。

——白騎士事件とも呼ばれる悲劇に。

日本を射程範囲ないとするミサイル基地が二千三百四十一発ものミサイルを発射したのだ。

そしてそのミサイルの半数を破壊したのがISだった。

それを垣間見た政府や国が、従来の戦闘兵器を軽く凌駕する力に危機を感じて殲滅する事にしたのだが、呆気なく撃退されてしまう。

それ以降、ISの関心が高まり、男女平等となった世界を女尊男卑の世界に変えてしまった。

理不尽なまでに圧倒的に。

小さい頃の俺は気づかなかったが、今の俺なら容易に気づく事が出来た。

二千三百四十一発の半数を破壊した残りのミサイルはどうなったかと言つ事实に。

何故前触れも無くミサイルが発射され、都合良く、白騎士が存在して破壊できた事实に。

正式発表では死者は皆無だと言われているが、一千発ものミサイルが破壊されていないとなると被害は壮大なはずだ。

ましてや、小国である日本で事件は起きたのだ。被害はあるはずであり、被害者、死者も勿論いただろう。

こんな容易に想像できる結果に政府は何故隠したのか、何故ミサイルは発射されたのか、何て今になっては考えるまでも無く、至極簡単に理解できた。

全ての、世界の、混沌の原因は間違いなく――篠ノ之束だ。

そして肝心のISは宇宙開拓の礎から軍事兵器へと移転した。

宇宙の活動を目的としているはずのISが何故、兵器になっているのか。

あれほどの力を明確に誇示されれば理解できるが、ISの産みの親である篠ノ之束は軍事兵器となる事を承諾した。

未来が混沌と化すのが目に見えているというのに、平和になった世界を篠ノ之束はぶち壊したのだ。

そして男性は女性に虐げられる事が常識でもあるような時代になる。

急激になる訳ではないが徐々に女尊男卑の世界となってしまう。

法律までもを変えてしまう。

幼い俺はそんな未来になるとは微塵も思っていなかった。

しかし、幼い俺でも知っている事があった。

知ってしまった事があった。

ISを作ったのが篠ノ之束で、篠ノ之束の親しくて強い人間は一人しかいない事を、ISが女性しか扱えない事を。

知っていて、知ってしまった。

理解してしまった。

正体を隠していても感じてしまった。

知らない方が良かったかも知れない。

——白騎士が俺の姉である織斑千冬だと。

でも幼い俺が知った事であの頃の俺が劇的に変わった訳でもない。

ただ事実を知った事で徐々に変わってしまう。

年を重ねると成長するように俺の負感情も成長してしまったのだ。

そして理解してしまう。

俺の心を数年間に、小さくも確かな負の感情を——認識してしまうのだ。

第二話（後書き）

一夏が原因を主犯を微かで臆げであるが知ってしまい、心が徐々に変わって、認識していく話です。

考える力があればわかるようなヒントが原作にもありましたので、リアリティのある話になっていればいいのですが、何分小説を書くのは難しい。

次回かその次の回にでも一夏の心の決定打を書いてみたいです。

この作品を読んで原作に不満やアンチ要素があれば教えて頂きたいです。

ヒロイン意見も募集中です。しかし、原作の立ち位置できに難しいキャラがいるんですよ……

第三話（前書き）

この小説の描写はくどく、曖昧にしております。

ただ読むだけの小説ほどつまらないものはないですから、意味深な描写を多くしてあります。

この作品で描写にない隠された部分を思考し、考え楽しんでもらえれば嬉しいです。

第三話

白騎士事件をきっかけにアラスカ条約が結ばれた。

正式名称は『IS運用協定』、軍事転用されたISの取引などを規制し、ISの技術を独占的に保有していた日本への情報開示、勢力を削減して、ISの共有を定めた条約である。
これも今思えば可笑しい故に怪しい。

日本が武力を圧倒的に支配していたにも関わらず、簡単に簡潔にアラスカ条約を認めた。

他国からしたら不満で仕方がないが、簡単にその不満を認めるはずがない。

開発者の篠ノ之束は日本生まれで、日本育ちで、日本在住だったのだから。

そう考えると日本政府は裏で何かをやっていたに違いない。

他国との、篠ノ之束との、公にされていない事実があったはずだ。

金か、コネか、技術か、権力か。

それがあつたとしても不思議だ。

ISが日本で誕生した時点で、篠ノ之束が日本人である時点で、日本は全てを手に入れたと言っても良かったのだから。

幼い俺には関係ない話だった。

だっただけなのだ。

俺は何の関係もなかった。

ただ、近くにいた人物が関係してあっただけなのに、関係のなかった俺に責任が責務がのしかかってきた。

男女差別、イジメという行為が。

ISが誕生してから男だからと差別され罵られ、虐げられてきた。俺だけじゃなく、世の中の男性が経験してきた事だろう。

小学生の時点で差別され、ISを扱う事が出来る女子は優遇される。

優遇された女子はISを扱えない男子を卑下にし、罵り、虐げる。

そんな理不尽な行いに黙っている男子何て勿論いない。

だが、黙って我慢せざるを得なかった。

反抗し、抵抗した男子諸君は次の日から学校に来なかったのだから。

来なかったのではない。

来れなかったのだ。

女子に逆らうと学校に来れなくなる、と言う噂も男子達の間で流れ、俺達、男性は抵抗や反抗が必然的に出来なくなってしまった。

だが、抵抗や反抗を続けるやつもいる。

俺の近くにもいたのだ。そういう奴らが。

そんな男子や、学校の教師でもある男性が敵視したのはIS開発者の篠ノ之束の妹——篠ノ之箒であった。

彼女もこの理不尽な世界に、姉に、責任を責務を負の感情を押し付けられたのだ。

そんな事を無垢で、純粋な俺は容認できる事態じゃなかった。

幼なじみが、友達が、自分と同じ被害者が、理不尽に罵られ、虐げられている光景を我慢できなかった。

その光景を優遇された女子も見ていた。

見ていたからこそ、その光景に、圧倒的な力に暴力に恐怖し、箒を庇う事は出来なかった。

自分達も一人になれば、もしかしたら暴力を、反発を受けるかも知れないのだ。

故に庇おうとしなかった。

それだけじゃなく、より過剰に、集団的になってしまったのだ。

その事に俺は心底、絶望し、嫌悪し、憤怒した。

以前まで分け隔てなく、遊んで、交流して、イジメも差別も無く、笑顔で学校生活をおくっていたのに。

現状維持で良かったのに、そのまま良かったのに。

全てが壊れてしまった。

そして俺が幼なじみであり、特に仲が良かった篤を庇った事で俺の心が壊れて、歪んでしまった。

最近まで共に女子からのイジメを、差別を、暴力を乗り越えてきた男子の友人達、学校の教師達の反発が俺に襲いかかった。

ただ、幼なじみが、友達が、悲しむ顔を見なくなっただけなのに。

自分の心に正直に、従っただけなのに。

こんなにも簡単にあっさりと壊れてしまった。

それからというもの、小学校での生活は劇的に変わってしまった。

女子と男子の両方から襲いかかる暴力と言う名の恐怖で、学校生活が彩られてしまう。

俺は剣道をしていた。才能もあった。

だが、圧倒的な暴力の前では成す術もなかった。

武力だけじゃどうにもならなかった。全然足りなかった。

幼なじみの箒を救う事が出来ず、ただ庇い、身代わりに、なってやれる事が精一杯の意志表示だった。

幸いにも唯一の仲間であり、味方である箒が傍にいて、小學校生活を支えあっていた。

そんな日々を過ごして行く内に、この絶望の原因を作った篠ノ之箒の姉——篠ノ之束を嫌うようになった。

無垢で無知で無力だった幼い俺は、純粹に篠ノ之束を嫌う事しか出来なかった。

何故俺はこんな悲しい日々を送っているのかと。

罵られる毎日、暴力を振るわれる毎日、友を庇う毎日。

何でこんな毎日なんだろうと。

そして何で誰も助けしてくれないのだろうと。

唯一の家族——姉の千冬でさえもこの絶望の毎日から助けってくれなかった。

俺を養っていたから、他の事で気をかける事が出来なかったのは幼

い俺でも知っていた。

でも少しで良いから、ちょっとでも良いから、気にかけて欲しかった。

俺、織斑一夏と織斑千冬は唯一の家族なんだからと。

そして俺の唯一の心の支えと、幼なじみと、友達と、決別する事になっちゃおう。

篠ノ之家の引っ越しが決定した。

俺は箒が引っ越しを喜ぶだろうと思った。

こんな毎日から脱出できるかも知れないからだ。

だが、箒は喜ぶ事はなく、悲しんでいた。

「一夏を一人には出来ない！心配だ！一夏には私が必要だ！」

そう彼女は断言した。

俺は可笑しくて笑っちゃった。

お前が一人になりたくないだけだろう。お前を庇っていたのは俺だろう。お前には俺が必要だろう。

そう言つて強がつて背伸びする彼女を見て、そう言われて純粹に嬉しかった。

箒の「心配だ!」と言つ言葉は紛れも無い本心だと思つたから。

それでも離れたくなくても、別れ時は来てしまった。

その決別の時、俺は今まで箒に話していない、俺の心の内を話した。

短い言葉でもあの頃の俺は勇気を出して言つたのを覚えている。

「俺はお前の姉の篠ノ之束が嫌いだ」

初めて箒にそう言つた。

二人は家族だからと遠慮して言いずらかつたのかも知れない。

でも、今まで誰にも言えずに我慢してきたこの感情を言葉を発する事で、何かの枷が外れたのような気がした。

それを聞いた彼女は驚いた表情も様子もなく。

「ああ、私も嫌いだ」

そう清々しそうに断言した。

篤が傍からいなくなって俺は一人になった。

これからが俺の本当の絶望だったかも知れない。

これまではただの序章に過ぎなかったのである。

——第一回モンド・グロッソで織斑千冬がIS最強の称号『ブリュンヒルデ』を獲得した。

そして俺の本当の絶望、本当の戦いが幕を上げたのである。

第三話（後書き）

一夏の戦いがついに始まりました。

何の戦いなのか、何と戦うのかまだ明らかにされていませんが、読者の皆様一人一人違う予想をして頂けるといいのですが。

ここまでの話で一夏の心情を理解して頂けていれば幸いです。

そしてついにヒロイン一人目がほぼ確定しました！原作の矛盾した部分や、不満を指摘するつもりですか、この作品の幕を気に入って頂ければ嬉しいです。

この作品を書き初めて四日目なのですが、アクセスや感想が沢山頂いてとても嬉しいです。

読者の皆様が楽しめる作品に精進して行きたいと思います。

第四話（前書き）

感想やご要望いつでも受け付けています。

気に入らない部分もありますが、それでもよければこの作品をよろしく願います。

第四話

筭が去った後でもイジメと言う行為は続いた。

心の支えを失ってしまった俺はもう我慢する事が出来なくなってしまった。

既に友達も仲間もいなかった俺は思う存分に、心に従った。

俺に暴力を振るっていた男子数人を病院送りにしたのだ。

筭がいれば、まだ心を制御出来ていたかも知れない、でも居なくなった事で彼女が被害を被らなくなった。

だから、俺は思う存分に暴れた。

その事件をきっかけに表立ってイジメをしなくなってしまったが、それでも無くなったわけじゃない。

直接的なイジメから間接的なイジメになったのだ。

ノートが破かれていたり、鞆の中身が失くなくなっていたり、机が無くなっていたり。

そして完全に学校では孤立してしまい、希望の無い、俺の心は完全に冷めきってしまった。

それならまだ良かったものの、モンド・グロッソで優勝した姉のお

かげで、俺はまた差別されてしまう。

姉は偉大なのに、姉はIS最強なのに、姉、姉、姉、姉。

もはや、誰も俺を見ていなかった。

姉が優勝したおかげで女子からのイジメはなくなった。

だが、俺は姉の織斑千冬と比べられる毎日を送っていた。

姉と比べられる毎日、俺を見ずに姉を見る毎日、間接的なイジメの毎日。

次第に姉を嫌悪するようになってしまった。

姉がいるから、姉がISを扱うから、姉が篠ノ之束と親友だから。

俺はこんなにも不幸なのだ。

不幸じゃ生温い、地獄と言ってもいい。

俺は生きているのか、と疑問に思うほど無気力な日々を送っていた。

そしてそんな毎日を過ごしていると転校生がやってきた。

——鳳 鈴音と彼女は名乗った。

出合いは特に変わったものでもなく、隣の席になった事で初の会話

を交わした。

心が冷めきっていた俺は口数も少なかつただろうし、冷酷な態度をとっていただろう。

そんな俺に鈴は、初対面だというのにしつこく話かけてきた。

気さくで明るくて誰とでも仲良くできそうな鈴だが、そう世の中は甘くはなかった。

——鳳鈴音は中国人という理由で人種差別を受けていたのだ。

本当に人間は人と比べ、差別するのが好きな生き物だと痛感した。

ただ生まれた場所が違っただけなのに、肌の色も大して変わらないのに。

他人と少し違っただけで差別される。

本当に気に入らない。

国籍が違っても生まれた場所が違っても肌の色が違っても、同じ人間だというのに。

差別事態否定するつもりはないが、見た目で過去で周りで差別するのは許せない。

人は能力で差別するべきだ。

そう俺一人が思っただけでは世界は何も変わらない。

直接的なイジメはなかったが、鈴はイジメられていた。

事の発端はただのからかいからだったろうが、次第にエスカレートしていった。

イジメを受けていた俺は加害者を許せるはずがなく、また俺は被害者を庇ってしまった。

それからというものの、簾がいた時期に逆戻りした。

それが理由で鈴とは友達になったが皮肉なもので、同じ境遇者だったから友達になったようなものだ。

もつと純粹に友達が欲しかった。

悲しみからじゃなく、楽しみから、笑顔から。

だからと言って友達になった俺達が笑顔じゃなかったわけじゃ無い。

鈴はイジメを受けていたというのに、転校当初と同じように笑顔で、気さくで、楽しそうにしていた。

鈴はいつでも前向きだった。

でもやはり、彼女は恐怖し、悲観していた。

学校に行きたくないと言った事もあるぐらいだ。

その言葉に同意したが、姉に養ってもらっている俺の身では登校拒否なんて出来なかった。

そんな日々の中、俺達は中学校へ進級した。

中学へ上がったとは言え、今までの日々が変わった訳でもなく、同じように差別されていた。

そんな中、俺達の輪の中に介入してきた奴がいた。

——そんな彼は五反田弾と名乗った。

弾は正義感があつたのかイジメを受けていた俺を庇った事で俺らの仲間入りしたのだ。

弾は物事を深く考えず、鈴と同じように心で動く人間だ。

悪くいえば馬鹿とも言つ。

この三人で良く一緒におり、二人の親は飲食店を経営していたので親のいない俺をよく世話してくれた。

鈴の料理があまりにも美味しくなくて弾と二人で笑いあつた事もあった。

そして弾の妹、蘭と言う少女とも出会い、意外と充実した日々を過ごしていたと思う。

家に帰れば家事をする日々だったが、姉に養ってもらっていたので文句を言う事はなかった。

勿論不満はあった。

家事が全くできない姉の世話、千冬を嫌悪していた俺には苦痛だった。

あの傲慢で見透かしたような態度が何よりもカンに障った。

俺の事を何でも知っているとでもいう態度、何も知らない癖に構ってくる姉。

まだその頃は我慢できた。

イジメもなれてきたのか何処か達観するように気にしなくなっていた。

学校では孤立していた三人だったが、それでも楽しいと思える日々を笑顔で過ごした。

不幸だらけの中でも幸せだと思える日々を過ごしていても、やはり壊された。

——姉に招待された第二回モンド・グロッソによって。

織斑千冬が原因とも言える——織斑一夏誘拐事件。

その事件で俺の心は嫌悪と憎悪と憤怒で彩られた。

ただ普通に、イジメられていても何不自由なく生活でき、嫌悪は抱いていても憎しみはなかった日々に終止符を打つことになった。
何故俺はこんなにも周りに巻き込まれるのだろう。

俺の意志とは心とは無関係に、無慈悲に。

幕が引つ越した事で必然的に剣道、剣術を辞める事になっても一人で鍛練してきた。

他の人間や大の大人とやり合っても負けないと思っていた。

俺には力がある。

そう思っていた。

だが、矛盾だらけでも欠陥だらけでも欠損だらけでも——やはりI Sには勝てなかったのだ。

第四話（後書き）

ヒロインに鈴が加わりました。彼女は原作でも不遇な扱いだったのでヒロインに入れました。

小さい頃の一夏を箒と鈴は知っているのでヒロインにしやすかったのもありますが。

今思えば原作一夏のヒロインはこの一夏のヒロインに入れやすい事がわかりました。

箒はIS開発者の束によつて、鈴は中国人という人種差別によつて。

鈴の差別は現代社会でもよくある話ですので、シャルはISの道具として、ラウラは試験官ベイビーという理由で、セシリアは両親の環境で、簪は偉大な姉が理由で。

こんな感じになりました。

ヒロインは今の所箒と鈴とシャルと簪の予定ですが、ご意見お待ちしております。

第五話（前書き）

今回は感想にあった回想シーンのようにして欲しいとご要望があったので回想シーンっぽくしました。

いきなり回想になると不自然なのでなくなっただけですが、過去の一夏を垣間見れると思います。

原作の面影も少し残っているかも知れません。

第五話

人生とは何か、中学生の頃考えた事があった。

人が生きると書いて人生。

俺という人間はちゃんと生きていたのだろうか。

生きるという事がどんな事か俺は分からなかった。

心臓が動いていれば生きているのか、息をしていれば生きているのか、涙を流し、笑えていれば生きているのか、生きてると自覚すれば生きているのか、死んでいなければ生きているのか。

結局の所、あの頃の俺は結論に至る事はなかった。

それでも人生というのは曖昧ではあるが理解は出来た。

だが俺の人生は自分で歩き、選んだ人生じゃなかった。

俺の意志とは無関係に周りに巻き込まれ、汚染され、勝手に人生が決まってしまった。

俺はただ普通に生きて、普通に笑い、普通に過ごし、普通に死ねれば良かった。

俺が普通じゃなくなってしまったからそう思う。

そう俺が理解し、納得し、確立した第二回モンド・グロッソ。

二度と忘れる事のない悲劇。

——俺が初めて自分という自我を認めた瞬間だった。

——モンド・グロッソと名称づけられ、軍事転用からスポーツへと落ち着いたISの大会。

その大会に前回総合優勝者の姉、織斑千冬に俺は招待されていた。

姉とは仲が良い訳ではないが、普通の兄弟と言ってもいい関係である。

例えば嫌悪していたとしても血の繋がった家族の縁は、そう簡単には切れやしない。

そして目の前で繰り広げられるISの競技に俺は純粹に凄まじいと思った。

自由に空を飛び、変幻自在に方向転換でき、圧倒的な演出に、派手に、強さに、誰もが興奮しただろう。

例えば、男女差別されていた男性でさえも、興奮したに違いない。

勿論、この俺もだ。

誰もが夢に描いたものが具現し、存在しているのだから。

ISを装備し、競技場内で活躍する女性達はとても輝いて見えた。

その中でも一際輝いて見えたのは俺の姉、ブリュンヒルデの織斑千冬だった。

織斑千冬専用のIS『暮桜』を身に纏い、活躍する姿は誰もが見惚れた事だろう。

事実、目の前で見ている俺でも思わず見惚れてしまった。

そして姉は圧倒的な活躍により、順調に優勝へと勝ち進んでいた。

「――？一夏か。ここは関係者以外立入禁止だぞ」

一日の種目が全て終わった後、俺は姉に会う為に控室を訪れていた。

「ああ、知ってる。近くにいた警備員に聞いて案内してもらった。俺の名前を出したら快く引き受けてくれたぞ」

「そうか。それで用件は何だ？私を訪れに来た、という事は用件があるのだろうか？……ふむ。決勝進出を祝いに来たと言った所か？」

何処か嬉しそうな表情を浮かべ、聞き返してくる姉は不敵に微笑していた。

この控室には俺と姉しかいないので、彼女は家にいるかのように接する。

他に人がいればこの対応も違ったかも知れない。

姉は人前では表情を固くし、近寄りがたい雰囲気醸し出しており、今は俺以外に人がいないから気を緩めているのだろう。

「まあ、それもあるが、招待してもらった身でもあるし、顔ぐらい出しておこうと思ったのだ。それより決勝進出おめでとう。千冬姉ならこれぐらい簡単に事を成すだろうと思っていたが」

この今回の開催地ドイツまでは俺一人で来たので無事に来れた事を報告しに来たのだ。

「とは言っても決勝進出が決まったのは格闘部門だけだな。まあ、一夏が無事に到着してくれて良かった。お前が何か仕出かすのではないかと、冷や冷やしながら待っていたんだが、いらぬ心配だったようだ」

そう言って姉は微笑んだ。

その表情を見て彼女が言っただ事は嘘じゃないと理解できる。

姉は以外と心配性なのだから。

「俺はもう中学生だ。そんな心配はしなくていい。何時まで経っても餓鬼ってわけじゃないんだから」

それでも俺は生活費を稼ぐ為に年齢を偽ってアルバイトもしているのだ。

残りの金は自分の趣味であり、生き甲斐でもある武術関係に使っているのだが。

「姉が弟の心配をするのは家族として当然だろう？お前がアルバイトをしているおかげで助かってはいるが、あまり無理はするなよ。まだ中学生何だから」

姉はいつも話に弟や姉、家族というキーワードを良く使う。

まるで、自分の心を支えているかのように。

「ああ、分かってる。自分の事は自分が一番良く分かってる。千冬姉もあまり無理はするなよ。他の種目もまだ終わってないのだから」

このモンド・グロッソの大会は数日間にかけて行われている為、まだまだ種目が残っているのだ。

「心配するな。弟に恥を欠かせない程度には活躍するつもりだ。私はこの後、暮桜の整備があるから済まないが一緒に帰れそうにない。先にホテルに帰っててくれ」

その配慮が俺の心を威圧しているのだが、姉はそんな事、微塵も想像していなかっただろう。

そのまま会話を終えた俺は予約をとってあったホテルへ向かった。

出場者である姉とは勿論違う部屋で階も離れている。

この時、もし俺が姉の織斑千冬と一緒にホテルへ向かっていれば違う未来があっただろう。

姉を憎悪する事もなく、姉と理解し合っていたのかも知れない。

しかし、願った所で何も変わらない。

もうこれは運命何だと言いつけて諦めるしかない。

「――？何だ？」

ホテルへ向かっていたタクシーが赤信号でもないのに急に停車したので不信に思っている。

俺の乗っているタクシーの後部座席の扉が開き、俺は意識を失った。

この後待ち受ける悲劇を気絶する前の俺は夢にも思わなかっただろう。

気絶している俺も思わなかっただろう。

あんな事になる何て、こんな事になる何て。

そして俺はこの後、悔やむ事になる。

自分の無力さを、非力さを。

理不尽な俺の人生を。

この世界を、俺の世界を。

たった一人の血の繋がった家族を。

——憎悪する何て思ってもいなかったのだ。

第五話（後書き）

次話ぐらいで過去編が終了しそうです。

まだ予定ですのでまだ続くかも知れませんが。

今回の話は回想っぽくなっているといいのですが、書いてる最中結構難しく感じました。

一夏が憎悪を抱く前の話でこの話までの一夏は比較的原作に近い状態です。

千冬も原作っぽくしましたが、不自然でなければいいですね。

感想やご要望も気軽にお願いします。

この作品を読んで頂いた皆様が楽しめていただければ幸いです。

第六話（前書き）

更新遅くなり申し訳ありません。

最近、このサイトでこの小説と似たような設定を見かけたのですが、
どうなのでしょう。

気のせいならいいのですが登載日がこの小説の後なので気になった
のです。

まあ、二次創作何て似たような物が多いですが。

更新を待っていた読者の皆様の期待に応える事が出来れば幸いです。

第六話

人はとても脆く、曖昧で、矛盾だらけである。

人は無知であり、それ故に未知を恐れる。

知らない事が怖くて、恐ろしくて、人は知ろうと努力し、追求する。

それは知的好奇心でもあり、本能的なものでもあるのだが、人は前を向き、遙か先を見据えて生きる事で近辺を見失う事が多々ある。

弱い事が嫌で強くなろうと、無能が嫌で有能になろうと。

誰かと比べ、自分が誰かと劣っていれば劣等感を覚え、自分が誰かと優れていれば優越感を覚える。

古今東西、人は誰かと比べ、競い合い、争い合い、生きてきた。

それ故に人は失うものが多くあった。

世間では当たり前で、当然だと認識し、さして重要だと想定していなかったものが重要だったのだと気づく。

その些細な事は当たり前過ぎて、当然過ぎて、失ってから初めて気づくのだ。

大切なものはいつも傍にあるというのに、人は失い、遠ざかり、手の届かない所まで見失って初めて認識し、後悔する。

人はいつも自分勝手な生き物だ。

それは考えてみれば当たり前前で、自分自身以外は他人で、例え血が繋がっていても、他人なのだから。

他人の心も感情も考えも共有できず、分からない。

だから人は他人の心を立場を気持ちを考えを、想定し推測する。

しかし、人間という生き物は不完全で、いつもいつでも、他人を氣遣う事など不可能で。

——結局、人は自分を最優先するのだ。

——この状況、現状を俺は冷静に捉えていた。

咄嗟の出来事であつた為、対処は出来なかったものの、この状況はある程度把握出来た。

——俺こと、織斑一夏は誘拐されたのだ。

手足は頑丈な縄のような物で屈強な椅子に縛り付けられていた。

これは完全に拉致監禁状態である。

この状況で目を開け、誘拐犯に気づかれるのは得策ではないので、此処がどのような場所かは分からないが屋内で間違いなさそうだ。

湿度が高く、埃っぽくて、温度は低い。

騒音も特になく、聞こえるのは人の声と機械の機動音だけだ。

誘拐犯の声は聞こえるのだが、日本語ではないので、理解出来ない。

恐らく、現場であろうドイツ語か英語だろう。

中学生である俺は英語の授業を受けてはいるのだが、本場のなまりの入った英語はほとんど理解出来ないので、聞き耳を立てても無駄だろう。

この現状では救助を待つしか手はないか。

十中八九、救助はくるだろう。

誘拐というのは弱みを握り、目的をおびき出す。或いは弱みを握り、目的の何かを奪うのか、圧倒的な優位で交渉するのかのどれかだろう。

他にもあるかも知れないが、こういう状況ではこの三つの可能性が高い。

恐らく目的は織斑千冬だろう。

少し武術の嗜みがあるただの中学生を誘拐何てある可能性はかなり低い。

ましてや、此処は外国である。俺本人が目的である可能性はほぼゼロだ。

なら、この時期に誘拐が実行されたという事は大会が目的か、誘拐犯が優位に立てる状況を作るのが目的か。

世界最強の織斑千冬の弟である俺を誘拐したのだから念入りに策を練っていたのだろう。

ならば、かなり前から計画していただろう。

そうすると、この誘拐犯は少数ではない、もっと大人数で組織的だろう。

理由としては最も大きい、織斑千冬の身内を誘拐するのはデメリットが大きすぎる。

故に決行するならばそれ相応のメリットがなければ、このような事件は起きない。

考えはいくらでも思い浮かぶが、所詮は推測。

当たる事もあれば、外れる事もある。

だが、これだけは明確に確実に分かる。

——俺はまた巻き込まれたのだ。

また無慈悲に、直接的では無いが間接的に、因果的に。

織斑千冬と篠ノ之束とISに。

やっとやっと、不幸の中でも確かな光を見いだせたのに。

何故、俺はこのISという螺旋から抜け出せないのだ。

武力は得た、知識も得た、後何が足りないのだ。

武力が足りないのか？

知識が足りないのか？

地位か？金か？権力か？情報か？

俺はどうすればいいんだ。

心を隠し、偽り、妥協して生きてきてさえ、抜け出せないのか。

俺は自分という自我が霞み始めた。

何故俺がこんな思いをしなければならない。

何が悪かったのだ。

俺は善と呼べる人間ではないが悪とも呼べる人間でもないはずだ。

それでも原因だけは分かる。

織斑千冬と篠ノ之束とISとこの世界だ。

それだけは分かる。

それ以外には考えられない。

俺が嫌悪や憤怒の負の感情を募らせ、上昇させていると辺りは騒がしくなり始めた。

誘拐からどれほどの時間が経過しているのかは分からないが、かなりの時間が経っているのだろう。

辺りにいる外国人の怒声や騒音で騒がしくなっている状況を利用して、薄目に目を開いた。

その光景はIS、IS、IS、IS。

殺風景の中にせわしなく動き回るIS。

世界でも数少ないISが何機もある。

これで確定した。

この誘拐犯は組織だ。

それも大きく、膨大で、武力を権力を持つ組織だ。

そう確定し、認識していると、空気を地を揺るがす、凄絶な爆音が響き渡った。

「一夏あああ——貴様らただでは済まさんぞ！」

IS暮桜を身に纏い、怒髪天を突くような怒りを表わにした織斑千冬がいた。

その怒り狂った姿を見て、一瞬だけ歓喜した。

待ちに待った救助が来たのも理由になるが、俺が誘拐され、一番に俺の名を呼び、俺を思って来た事が純粹に嬉しかった。

だが、それ以上に不安だった。

冷静さを失い、自分を見失い、先の事しか見据えていない姉の姿が、何よりも不安で恐怖した。

怒り狂った姉の形相に恐怖したのではない。

ただ純粹に、この先にある未来が恐ろしくて、恐怖した。

——少し、少しだけでも織斑千冬が冷静さを持っていれば、未来はあんな事にはならなかったかも知れない。

ただ、人生とは無慈悲で、想ったようにはならなくて。

小さな事が、些細な原因が、予期も予知も出来ないほど大きくなる
とは思いつかなかった。

——そう、大好きな姉だった織斑千冬が、憎むほど大嫌いになるなんて、思ってもいなかったのだから。

第六話（後書き）

この話で過去編は終わりませんでした。

すいません。

次で必ず、過去編を終わらせますので。

この話も期待に応えられてるといいのですが、私の力量じゃこれが限界に近いです。これから書いていくにつれて、進化出来ればいいですね。

感想やご要望、ヒロイン提案などいつでも受け付けておりますので、気軽にお願ひします。

次話は近い内に投稿する予定ですので、よろしくお願ひします。

第七話（前書き）

今回は更新が早く出来ました。

この話は結構難産でしたが、楽しんで頂ければ幸いです。

第七話

傷——それは一生、死ぬまで背負わなければならないもの。

身体の傷であつても、目に見えない心の傷であつても。

傷は例え癒えたとしても、完全になかった事にはならない。

擦り傷が痂となり跡が残るのと同じように、心に傷を負い時が経つても、過去として、記憶として残される。

生きている限り人は必ず傷を負う。

他者に傷つけられる事もあり、自分で傷を負ってしまう事もある。

自分で傷を負ってしまったとしたら、責任は自分で償わなければならないが、他者に傷つけられたとなれば、その責任は何処へ向かうのだろうか。

加害者が傷つけるつもりがなくても、傷つけたと思っていなくても、本人が傷を負ってしまうえば、傷と認識してしまえばそれは傷である。

自分にとって嫌な傷でも良い傷でも、小さな傷でも大きな傷でも負ってしまったえば、その傷は無視出来るものではない。

少なからず、被害者の今後を人生を変えてしまう事も有り得るのだ。

しかし、傷つけた加害者がその罪を償う事もあるが、その罪から逃れる者もいる。

自分が加害者だと気づいている場合もあり、気づかない場合もある。

結局の所、傷は自分で背負わなければならない。

加害者など信用できる者でもないし、傷を負うのは被害者なのだから、傷をどうにかするのも被害者本人なのだ。

——それは無情にも身勝手な話である。

——目の前の光景を目の当たりにした俺は茫然としていた。

この屋内に数機もあるISを相手にして蹂躪する織斑千冬に。

怒り狂い、思うがままに切り伏せ、この場を支配する織斑千冬に。

啞然とするしかなかった。

計画的にこの状況を作った誘拐犯達は成す術も無く、抵抗する暇も無く鎮圧されていく。

やはり、IS最強と言われる織斑千冬は別格だった。

この誘拐を決行し、成功する術や策があり、織斑千冬が来ることを予想していたであろう集団が滑稽にやられ、確実に数を減らしているのだ。

しかし、この圧倒的な状況でも俺は不安を掻き消せなかった。

このまま行けば、何事も無く無事に俺は救助されるだろう。

だが、憤怒する織斑千冬を見て不安を抱かざるを得なかった。

これは試合ではなく、戦場なのだ。

相手が有利な状況で何の策もなしに待ち受ける相手などいない。

それを今の織斑千冬が把握している気配はなかった。

そう軽率だったのだ。

計画的に策を練って、この状況に挑んでいれば良かった。

せめて、冷静を保って状況を把握できる状態であれば良かった。

でもそれは後の祭である。

もうどうしようもない。

過ぎてしまった事には対処何て出来るはずがない。

無事に何事もなく、この事件が解決してくれるのを待つしかない。

だが、その願いは無情にも、無慈悲に切り伏せられた。

既に誘拐犯の数は一桁となり、姉の織斑千冬は俺の傍で啞然と待機している者へと目標を定め、武器を構え、地を駆けた。

その様子を見ていた傍の誘拐犯は我に返り、行動に移った。

そう、その行動が悪かった。

予想はしていた俺は冷静さを保っておれたものの、織斑千冬には予想外の行動だった。

誘拐犯は自らのISの剣で俺を縛り付ける頑丈な縄を断ち切った。

どう足掻いてもびくともしなかった縄をたやすく断ち切ったISの性能に一瞬、驚愕した。

予想していた行動で俺は瞬時に誘拐犯から距離を離そうと後方に跳んだ。

しかし、誘拐犯はその行動を予期していたかのように俺の真後ろへと回り込む。

ほんの一瞬だった。

その誘拐犯の動きは視認出来たし、反応もしていた。

だが、ただそれだけだった。

あまりにも早過ぎたせいで行動に移す事が出来なかった。

それが失態でもあり、不覚だった。

回り込んだ誘拐犯は俺の腕を拘束し、盾にしたのだ。

女性にしては有り得ない腕力と握力だ。

それでもISの性能とやらの御蔭なのか、腕を振り払おうとしてもびくもしない。

それで俺は人質として捉えられた。

だが、もはやこの状況では人質としてさえなっていなかったのだ。

刹那とも呼べる一瞬の出来事でも、織斑千冬は反応し、対処していたのだ。

しかし、それは失態であつた。

俺は人質としての役目もなく、ただの盾としての道具となった。

——そう、時は既に遅かった。

「——なっ!？」

織斑千冬の驚愕した声が漏れた。

その表情は焦り、苦痛に満ちていた。

——そして俺は姉である織斑千冬の振るう刀を捉えてしまった。

捉えてしまったから理解してしまった。

「——ぐ、あつ」

俺の視界が紅く染まり、一筋に走る激痛に苦痛の声が漏れる。

その瞬間、飛び散る血飛沫が俺の目が捉えた。

これはもう苦痛や激痛などで計れるほど生易しい痛みではない。

燃えるように一途に走る痛みは、もはや皮膚を蒸発させているのかと錯覚するほどの痛みだ。

顔の左側に走る激痛でも、俺の脳は機能していたようで不可解な事に気づいてしまった。

深紅に染まる視界の中で捉えた血飛沫は、“右目”でしか捉えていなかったのだ。

その深紅に染まる視界の中で、表情を蒼白させ、驚愕と啞然の表情をする織斑千冬が見えた。

そして理解した。

他の誰でもない血の繋がった家族の織斑千冬に俺は、斬られたのだと。

その茫然と力無く立ち尽くす織斑千冬の後方に、列を作って進行するIS部隊を見たと同時に俺は意識を失った。

これはもう取り返しのつかない事件だった。

今までは意図的な被害はなく、因果的で間接的な被害だったのが、初めて直接的な被害へと俺に振り懸かったのだ。

完全に巻き込まれた俺は完璧なる被害者となった。

——意識を失った俺が目を覚ました場所は見慣れぬ場所だった。

この独特な匂いと鼻を突くようなアルコールの匂い、俺の寝ていた医療的なベッドで此处が病院なのだとすぐに気がついた。

そして俺は違和感に気づいた。

顔の左側を覆う違和感と視界にちらりと写る白い布。

それに気がついた俺は室内に設置されている鏡へと向かう。

鏡に映った俺の姿は左目を覆うように巻かれた包帯があった。

その姿を見た俺は意識を失う前の事を不意に思い出した。

そうだ。姉に斬られたのだと。

そう思い出した俺は、少し躊躇したが、左目を覆う包帯を外す。

鏡に映った姿を見て俺は絶望した。

左目を縦に一筋の傷がある。

その傷は眼球の瞳を縦に割っているように筋が入っていた。

何と悲惨な姿だろう。

そして全く見えない、視力を失われた左目を見て絶望した。

十数年、共に生きてきた左目が失われたのだ。

喪失感と共に苛立ちを覚えた。

何故、何故だ。

何故、俺は左目を失ったのだ。

片目で見ただけでこんなにも見る世界は違うのか。

何とも言えない、このやり切れない感情に涙が頬を伝う。

「——ははっ」

そして苦笑した。

俺の左目は視力だけでは無く、涙すら奪ったのかと。

俺から日常を奪い、平穩を奪い、友を奪い、遂に俺の左目までも奪ったのか。

我慢して偽り続けてもこの様かと。

俺は何の為に心を否定していたのか。

今までの苦労は苦痛は何だったのか。

考えるだけでも苛立ってくる。

——その時、ガラツと音を立てて室内の扉が開いた。

そこには花束を抱え、無気力に無表情に佇む織斑千冬がいた。

そして鏡の前で立ち尽くす俺を見て一瞬だけ歡喜の表情を見せたが、ほんの一瞬だけで苦痛と悲哀の表情へと変わった。

「——済まない！私の所為で……一夏の左目を——本当に済まない！」

俺の下まで来て、目に涙を溜めながら深々と頭を下げた。

その光景を見て俺は負の感情が沸き上がるのを感じた。

それは苛立ちから憤怒へと、嫌悪から憎悪へと昇華した瞬間でもあった。

「——ふざけるなよ。謝れば許して貰えらとでも？頭を下げれば俺の左目が返つてくるとでも思っているのか？家族だから俺が許すとも思ったのか？——そんな事しても許せるはずがないだろ！千冬姉が……お前が！お前らが、俺の左目を——俺の人生をぶち壊したのだ！」

右目から涙を流し、右腕が震えるほど包帯をきつく握りしめた俺の怒声が室内を支配する。

その怒声を聞いた織斑千冬はただ啞然としていた。

俺は初めて姉の織斑千冬に反抗とも呼べる事をした。

もう我慢出来る事でもない。

自分の心を偽り、我慢し、妥協し、嘘をついて来たがもう終わりだ。

過去の織斑一夏とは、自分の心を肯定出来ない貧弱な織斑一夏に終
止符を打つ。

俺はもう自分を偽らない、隠さない。

自分で選べない理不尽な人生にも、半ば諦めていた自分にも決別し
よう。

俺は自分を否定しない。

心も感情も想いも。

誰にも屈しない強固な人間へ。

この憤怒を嫌悪を憎悪を力へ変えて見せよう。

IS開発者の篠ノ之束と、IS最強の織斑千冬と俺の人生を狂わせ
たISに。

終焉を。

——そして俺は初めて自分自身を嘘偽り無く、心の向くままに自我を肯定するのだ。

しかし、理不尽な人生は終わらない。

ISがある限り俺に平穏は訪れない。

——理不尽な人生など俺が切り伏せてやろう。

第七話（後書き）

この話の最後の方でクリアボタンを長押ししてしまい三分の一が消えてしまい、ぐだぐだになってしまったかも知れません。

この話で過去編は終了です。次回から原作開始ですが、原作最中に過去編の話も出る可能性がありますので御了承下さい。

感想やご要望いつでも受け付けていますので気軽にお願いします。

第八話（前書き）

遂に原作の幕が上がります。

更新をお待ちしていた読者様、今回は早く更新出来ました。

お楽しみ頂ければ幸いです。

第八話

世界、この世の理、人間、ありとあらゆる事柄、事象には限界がある。

しかしながら、その限界だと思われた事象を塗り替える事は不可能ではない。

そう、この世界には可能性と呼ばれるものが満ち溢れていた。

何事にも予想外の事態や、予期せぬ事がこの世界には頻繁に起きている。

ただ、その限界突破やイレギュラーを発見し、観測できるのは人間のみである。

だが、一人の人間だけでは全てを観測出来るはずもなく、膨大な数の人間によって、ある程度の事象や事柄を観測しているのだ。

人一人では限度もあり、人間という存在は有限である。

故に人間は一人では満足に生きては行けない。

そして、その観測する立場の外にいる人間は、自分の目で確認する事が出来ない。

だから人は観測した人間の発表に疑問を抱きながらも、納得するしかないのだ。

だが、その観測を、結果を否定する事もある。

——事実、この俺が否定してしまったのだ。

——高校受験を控えた二月中旬。

俺は私立藍越学園を受験しようと試験会場に来ていた。

しかし、試験会場は藍越学園本校では無く、二日前に発表されたのだ。

昨年起きたカンニング事件の御蔭で、各学校が二日前に通知するという政府の計らいにより、受験生である俺は不本意ながら従うしかなかった。

俺が藍越学園を受ける動機は至極簡単に学費が安いからだ。

奨学金制度はあるものの、学費が安いというのは重要視できる。

ましてや、両親のいない俺にとって安いのは有り難い事だ。

アルバイトをしながら学費を返す金を貯金をしつつ、今でも修練している武術にも金を使う事が出来るのだ。

しかも藍越学園の制度もしっかりしており、卒業後の進路までケアしてくれる。

故に俺は藍越学園の試験を受ける。

学校受験自体に対する動機は時間が欲しいからだ。

就職すれば野望を完遂する為の土台作りをする時間はないだろうし、腕を磨く時間もない。

故に自由度の高い学校に通うのである。

これは決定事項だ。学力も問題ない。

この俺がたかが学校受験如きに堕ちる道理もないのだ。

それはそうと、会場場所を通知された時、少し疑問に思う事があった。

私立である愛越学園の試験会場が市立の公共施設である多目的ホールに選んだのだ。

少し妙な話だが、通知に来た場所が此処なのだから納得するしかない。

腑に落ちないが、仕方がない。

そして今現在、また腑に落ちない事があった。

この試験会場は異質だったのだ。

入口近くに案内所も無く、案内図もない。

おまけに辺り一面をガラス張りにした廊下に、意味もなく壁に張られたタイル。

無駄に天井も高く、ランニングコストのかかりそうな照明。

試験会場としては不自然だ。

しかし、試験会場は此处で間違いない。

俺が試験会場を間違えるという致命的なへまはしない。

これは断言できよう。

ならば、何も恥じる事はない。

案内図も何もなく、試験会場も見当たらない。

仕方がないか、次のドアを開けて場所を探ろう。

人ぐらいいるだろうと思い、ドアを開けた。

「あー、君、受験生だね。はい、向こうで着替えて。時間押してるから急いでね。ここ、四時までしか借りれないからやりにくいっ
たらないわ。まったく、何を考えて……」

扉から入った俺の顔を見ずに、独り言のように言いながら部屋を出て行った女性に不愉快な思いを抱いたが、教師風な女性の指示には従った方が懸命だろう。

しかし、時間が押してる割には俺以外の生徒は此处まで出会わなかった。

随分前にやって来て既に会場で待機している可能性もあるが不自然だ。

遅刻している訳でもないのにこんなにも人がいないのは可笑しい。

嫌な予感がする。

それはとてつもなく大きな災いと言ってもいい。

そう俺は直感した。

しかし、今の俺は自信も信念も野心も持ち合わせている。

災い如き、跳ね退けられないはずはない。

それが無理だったとしても飲み込んでやろう。

そう俺はまだ見ぬ直感から感じた災厄に対して決意した。

しかし、着替えると言われ、何に着替えればいいのか分からないが、カーテンの先にでも着替える物があるのだろう。

やはり、腑に落ちない。

ただの受験に着替えなど必要ないのだが、まあカーテンを開ければすぐにでも分かるだろう。

——そして俺の予感、直感、的中してしまった。

その的を感じさせられた根源は見ただけでも理解させられる巨大なものだった。

——そう、ISだ。

本能的に知識的に理解した。

正式名称『インフィニット・ストラトス』

宇宙空間での活動を想定されて作られたものの、宇宙進出は一向に進まず、兵器へと移行し、今現在ではスポーツへと落ち着いている。

だが、落ち着いてなどいない。

スペックを持て余しすぎて、スポーツにすら収まらず、今だに軍事力の要となっている。

しかし、このISは致命的な欠損があり、欠陥があった。

ISは女性にしか使えない。

そう致命的すぎる欠点があった。

欠陥はそれだけでは収まらず、矛盾だらけで、確定性のない飛行パワード・スーツだ。

俺からしてみれば、物の状態を理念を概念を確定していない道具、兵器はゴミ屑同然だ。

理に適っていないものなど信用に値しない。

それ以前に俺の人生を掻き回してくれた憎むべきISだ。

好感など持てるはずもなかった。

しかし、俺はまだISという物をこの目で見、触った事などない。

憎むべきISの構造も理解していた方がいいだろうと観察し、そして触れてしまった。

政府の、正式な発表を鵜呑みにしてしまった結果が不運を災厄を招いてしまった。

そして俺は不覚を、失態を犯していたのだ。

何故、こんな所にISがあるのか。

何故、俺は此处にいるのか。

そう気づいた瞬間理解した。

それと同時に触れたISのありとあらゆる知識が、俺の脳へと雪崩
込んできた。

それは既知のものから未知のものまで。

視覚野に接続されたセンサーが直接意識に侵入し、俺は——ISを
身に纏ってしまった。

「くくくつ、はははっ、あははははは」

皮膚装甲が展開し、推進機が作動し、右手に形成された接近ブレイ
ドが具現化し、ハイパーセンサーが最適化を終了したのを理解する
と、俺は高らかに声を上げて笑った。

それはもう、狂ったように。

「——謀ったか、篠ノ之束！——いやしかし、愉快だ。愉快過ぎる
ぞ！この俺が最も憎むべきISを起動させるとはな。ふざけた話だ。
男である俺が“これ”を扱える道理はない癖に扱えた事実。何たる
矛盾！面白い、乗ってやろうではないか篠ノ之束。この俺を人為的
に意図的に巻き込んだ事を後悔させてやろう！」

そして腹の内が煮え繰り返るほど、俺は狂ったように笑った。

俺は完全に篠ノ之束の罠に嵌まってしまったのだ。

試験会場の通知も、人払いも、この会場も全て、篠ノ之束が手配したものだろう。

こんな事をする人間は篠ノ之束しかいない。

だが良い。

これほど笑わせてもらったのだ。

過去の俺ならば、憤怒し、自分の人生を呪っただろうが今の俺は、違う。

自分を肯定するだけで、これほど自由になれたのだ。

否、自由と呼べるものではないかも知れないだが、俺の心はこれほどまでに解き放たれている。

それだけで今は十分だ。

焦る必要はない。時間はまだある。

時間を消費し過ぎれば、IS自体が自然消滅してしまう恐れがあるので、悠長にしている暇はないが、まだ時間はある。

こんな欠陥と欠損と欠点だらけで確定せず、矛盾している道具など、時代に取り残されるのは目に見えている。

だが、今はこれで楽しませてもらおう。

憎悪するISに乗るのも一興だ。

本当に愉快だ、愉快過ぎて歓喜すらしてしまう。

憎悪の歓喜、完全なる矛盾だ。

だが、まあ、敵の本拠地に出向くのも良い。

“奴ら”の腹を探り易くもなるだろう。

これから俺を狂い笑うほど楽しませてくれるのだろうか？

——IS共よ。

第八話（後書き）

遂に原作に！

本当に幕が上がっただけでした。すいません。

今回は予想通り一巻の一章となります。

途中で区切るかも知れませんが。

そして遂に一夏が進化しました。

その成長は明確だったと思います。読者の皆様が好感を持てる人物になってると良いのですが、変わりすぎましたかね。

本作で理不尽な徹底アンチを期待している読者様がいますと思いますが、本作は理に適った徹底アンチです。

理不尽で好き勝手に暴れる主人公何て矛盾だらけで好感なんて持てるものでもない、私は思います。

故にこの本作では理に適った徹底アンチにする予定です。

そして沢山の感想ありがとうございます。

その感想の中にヒロインはいない方がいいという意見が多数あったのですが、やはり原作的にも物語的にもリアリティを出すためにヒロインは入れますし、ハーレムにする予定です。

ただ、原作のような安直なハーレムにはならないと思います。

報われない歪んだハーレムになりそうです。

その関係は未来の話で楽しんで貰えると幸いです。

引き続き、感想やご要望、いつでもお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3109w/>

復讐する織斑一夏

2011年11月12日22時01分発行